娼館の一幕 〜若様と対面座位〜

宿場町の外れ、ひっそりと灯る行灯の明かりだけが二人を照らしていた。

粗末ながら清潔に整えられた座敷の上、神夜は若い男と裸で向かい合っている。年の頃は十代の終わりか、まだあどけなさの残る面立ちの少年だった。初めて女を買うのだろう、その指先は微かに震え、まともに神夜の裸体を直視できずに視線を泳がせている。

「あら、お可愛らしいこと♥」

神夜はクスリと笑うと、そっと両手を伸ばして少年の頬を包んだ。震える唇に、自らのそれをそっと重ねる。

「んっ……♥」

最初は触れるだけの口づけ。二度、三度と啄むうち、少年の強張りが少しずつ解けていくのを感じる。神夜は舌先で彼の下唇をなぞり、そっと割り入った。

「んむ……っ♥ ちゅ……んっ……れろ……♥」

熱く湿った粘膜同士が絡み合う。神夜の舌が少年のそれを優しく包み込み、吸い上げ、時折歯列をなぞるように這い回る。唾液が混ざり合い、ぐちゅぐちゅと淫らな水音が静かな座敷に響いた。

「ちゅぱ……っ♥ はぁ……♥ んふふ、お上手ですよ、舌を絡めるの……♥」

少年の荒い鼻息が神夜の頬にかかる。その初々しさがいじらしくて、彼女の秘所はとっくにクチュクチュと音を立てて濡れそぼっていた。

「こっちにいらしてくださいませ……♥」

神夜は少年の手を取り、自分の腰へと導く。そしてゆっくりと膝立ちになり、彼の腿を跨いだ。対面で向かい合い、目の前には少年の顔。そのすぐ下、互いの腹のあいだには、硬く反り立った若い雄の象徴。

「まあ……♥」

神夜は息を呑み、うっとりとそれを眺めた。年の割に立派に育ったそれは、先端を真っ赤に充血させ、今にも爆ぜそうに震えている。カウパーがトロリと溢れ、行灯の灯りを受けててらてらと光っていた。

「なんてお美しいおチンポ様……♥ あなた様に出会えたこと、感激極まりないです……♥」

彼女はパイパンの股間をさらに開き、自分の指で大陰唇を左右に割り開いた。無毛の白い丘の奥、ひくつく膣口は

すでにヒダをとろけさせ、透明な愛液が糸を引いて垂れ落ちる。

「さあ、いらしてください。わたしのまんこに……あなた様のおチンポ様を……♥」

腰を落としていく。ずぶぶぶぶ……っ。

「んぁあああああっっ♥♥♥」

熱く滾った亀頭が膣口を押し開き、ずぶずぶと侵入してくる感触。一センチ進むごとにヒダが雄を包み込み、締め付け、なお奥へと招き入れる。128cmの爆乳が少年の胸板に押し付けられ、ムニュゥ……と広がった。服から常にはみ出ている幅広の乳輪もまたぐにゃりと潰れ、逞しく尖った乳首が彼の肌に擦れて甘い刺激を送る。

「はぁ、はぁ、はぁぁ……っ♥ おチンポ様が……子宮のすぐ近くまで……来てます……っ♥」

対面座位で深く繋がりながら、神夜は再び少年の唇に自分のものを押し付けた。

「んむぅ……っ♥ ちゅ……ちゅぱ……れろぉ……っ♥」

キスをしながら、ゆっくりと腰を動かし始める。上下に、円を描くように。ぐちゅ……ぐちゅぐちゅ……。愛液が泡立ち、結合部から卑猥な水音が絶え間なく響く。

「んっ……んんっ……♥ はぁ……ちゅ……♥ おチンポ様、子宮口に当たって……んぁあっ♥」

唇を重ねたまま、神夜の腰の動きは次第に速まっていく。爆乳が上下に激しく弾み、パンパンと肌が打ち合わさる音が加わる。少年の両手が思わず神夜の腰を掴み、その細いくびれに指を食い込ませた。

「あっ……あっ……いい、いいですよ若様……もっと強く、もっと思い切り……♥ はぁ……んむっ……ちゅぱっ……♥」

彼女はキスの合間に甘い言葉を囁き、またすぐに唇を塞ぐ。舌を絡めながら腰を振り、膣壁でおチンポ様を締め上げる。子宮口が亀頭に吸い付くたび、少年の全身がビクビクと震えるのが伝わってきた。

「んぁ……♥ もしかして、もうイきそうでらっしゃいます……？ ふふ……♥ わかります、おチンポ様がさっきよりずっと硬く、熱くなって……ビクビクって脈打って……♥」

神夜はわざと腰の動きをゆるめ、焦らすようにキスを深くした。舌を絡め、ねっとりと吸い上げ、唾液を交換する。

「ちゅぱ……んぅ……れろぉ……っ♥ でもまだ、もうちょっとだけ……わたしと一緒に気持ちよくなってくださいませ……♥」

そう言うと、彼女は腰をぐっと沈め、最奥までおチンポ様を咥え込んだ。そして膣壁全体でぎゅうぅぅっと締め付

け、子宮口で亀頭をぐりぐりと押し潰す。

「んぁあああっ♥♥♥ 奥、奥に当たってますっ……子宮がおチンポ様にキスしてるぅ……っ♥♥♥」

そのまま彼女は激しく腰を打ちつけ始めた。パンッパンッパンッパンッ！ 結合部から飛び散る愛液が二人の腹を濡らし、行灯の灯りに銀色の糸を引く。爆乳が激しく跳ね回り、乳首は痛いほどに充血して先端からはうっすらと母乳が滲み始めていた。

「あっ♥ お乳、出ちゃってます……♥ でも気にしないで、もっと、もっと突いて……♥ あっあっあっ♥ んむっ……ちゅぱっ……♥」

再びキス。今度は貪るような、互いの存在を食い合うような濃厚な口づけ。舌を絡めながら腰を振り、お互いの息が荒くなり、全身が汗でテラテラと光る。

「んぅ……っ♥ 若様、もう、イきましょう……？ わたしも、もう……っ♥」

神夜は唇を離し、至近距離で少年の目をじっと見つめた。切れ長の瞳は熱く潤み、長い黒髪が汗で頬に張り付いている。桜色の唇が、だらしなく唾液の橋をかけたまま開かれた。

「んっ……んっ……♥ さあ、どうぞ……♥ 子宮で、わたしの子宮で、おチンポ様の熱い御神酒を……♥ いっぱい、いっぱい注いでくださいませ……♥ お願いします……っ♥ おチンポ様ぁ……っ♥」

腰を大きく回し、膣壁でぎゅうぎゅうと搾り上げる。パイパンの無毛の股間はもうグチャグチャに濡れ、大陰唇も小陰唇もヒダもすべてがおチンポ様に絡みつき、その精を搾り取ろうと必死にうごめいていた。

「一緒に、一緒にイきましょう……♥ んぁあああっ♥♥♥ キス、キスしながら……っ♥ んむぅぅぅっっ♥♥♥」

唇を重ね、舌を深く絡めた瞬間――。

ドクンッ！ ビュルルルルルッッ！！

子宮口に亀頭が押し付けられ、熱い精が爆発するように注がれる。それを合図に、神夜もまた背筋をゾクゾクと快楽の波が駆け上り、膣全体が痙攣しながら絶頂に達した。

「んんんんんん～～～～～～～～っっっっ♥♥♥♥♥♥」

キスで塞がれた唇の奥で、甘やかな悲鳴がくぐもる。舌を絡めたまま全身をビクビクと震わせ、子宮でおチンポ様の精を一滴残らず搾り取ろうと膣壁が波打つ。爆乳がぶるんぶるんと揺れ、乳首からは母乳がピュッピュッと飛沫を上げて少年の胸を濡らした。

「……っはぁ……はぁ……はぁ……っ……♥♥♥」

やがて痙攣が収まり、神夜はようやく唇を離した。互いの唾液が銀色の糸となって二人の唇を繋ぎ、行灯の灯りに儚く光っている。

「……感謝感激……極まりないです……♥♥♥」

神夜はうっとりと微笑み、まだ結合したままの腰を、今度はゆっくりと揺らし始めた。どろり……と膣口から白濁が溢れ、彼の腿を伝って畳に染みを作っていく。

「ああ……おチンポ様の御神酒がわたしの子宮の中でまだあんなに熱くて……♥ 今夜はまだまだこれからですよ、若様……♥」

彼女は悪戯っぽくウインクし、再び少年の唇に自分のそれを押し当てた。

「んっ……♥ もっと、もっといっぱい……子宮いっぱいになるまで、おチンポ様をくださいませ……♥ ちゅ……♥」

未だ衰えぬおチンポ様を膣内で感じながら、神夜は二度目の口づけを深く、もっと深く――。

（了）